

プラトーの思い出

泉 谷 勝 美*

もう16年も前のことである。当時全国の大学に吹き荒れた全共闘運動がようやくおさまったころ、イタリア会計史を研究しているものとして、一度は行ってみたいと念願していた私の外国留学が実現した。期間1年、めざすはイタリアのフィレンツェであった。会計学者の多くは英米独仏へ行くことはあっても、イタリアの長期留学は、おそらく明治以来私が最初であったと思う。今日ほとんど十分な情報もなく、これといった準備もしないまま、日本を飛びたったのである。

海外留学1年という条件でなにをするかがまず問題になる。一般には、語学の勉強、研究資料の収集、専門分野の研究、外国研究者との交流・視察旅行等が考えられるなかで、私はもう二度とイタリアを訪れる機会はなかりとうという判断のもとに、これまで私にとって最大の悩みであった現地資料の収集に重点を置くことを決意した。日本の会計史研究は英語・ドイツ語文献による、いわば、複式簿記発生史研究にとっては二次・三次文献の資料によらざるをえなかった当時として、私はイタリア会計史を研究する以上、現地イタリア資料によらなければ、複式簿記発生史の研究は不可能と考えていたからに外ならない。なにもしなくてもよい。資料だけは石にかじりついてでも集めてやろう。コピーを下宿の机に積み上げてその高さで孤独感を紛らわそうと考えた。こうしてフィレンツェ中央図書館へ毎日通い続けた。午前中に資料を検索し、みんなが昼食している時間帯をねらってコピーをとる。夕方からこれを下宿に持ち帰って点検をし、明日の仕事をこしらえ、出来上がったものは著者別元帳に転記してまとめたものから自宅の家内あての郵送手続きをする。

こんな生活を繰り返しているある日、私の指導教授であるフィレンツェ大学のメリス教授から連絡があり、9月からプラトーで始まる古文書解読講習会にでるよう勧められた。十分な語学的素養のもちあわせていない私にとって、これには躊躇せざるをえなかった。といって辞退もできず教授の勧めるままに出席することにした。これは全く予想もしなかったことである。私のようなものが講義を聞いてわかるだろうか。心配はつきなかった。

講習会が始まった。フィレンツェの北隣の小さい町プラトー、そこは14世紀後半、

* いずたに かつみ 大阪経済大学経営学部

同市の産んだ偉大な商人、フランチェスコ・ダディーニが活躍したところで、晩年彼の全財産と彼が生涯書き残した会計帳簿を慈善団体に寄贈したことで知られている。講習会はその古文書類が保存されているダディーニ古文書館で行われた。参加者はきわめて国際色にみちあふれ、ヨーロッパ各地から来ていた。東洋の日本から来ていたというのが教授の自慢の種であった。そんな次第であるから講義はわからなくても、サボることはできなかった。わからないことを朝の8時半から夕方の6時ごろまでじっと聞くことはまことに忍の一字に尽きた。聴講生は最初30名程度、それも日がたつにしたがって2人・3人と歯抜けになっていく。机の空席が目立つ。一番しんどいのは眠気との戦いである。講義は中世ラテン語に始まって、カタロニアン語、フランダース語と多岐に及び、その都度講師も代わっていった。そうしてやがてメリス教授の助手をしていたチェキー女史による中世イタリア商人の会計帳簿の解説に関する講義にたどりついたのである。

授業は午前中がメリス教授の会計史に関する講義で、自信たっぷりに流ちょうなイタリア語でゆっくりと彼の説を展開していった。とりわけ、ダディーニの古文書になると、手もとの現物を聴講生に回覧させたりして、複式簿記発生史や当時の商人の会計実務を紹介していたことが、今でもときとして思い出される。

そんななかで私を力づける講義がひとつあった。それは中世商業算術で、中世商人が行った加減乗除算が紹介された。早口K低音でしゃべるおじいさんの話しはチンプンカンプンであったが、事例解説で黒板に書くその数字の順位からこれらの方法をすべて理解することができた。そのなかでも中世の割り算は今日の方法とはかなり異なっていて聴講生を困らせた。教授が繰り返し繰り返し板書する例題の数字の書く順序、つまり運算に細心の注意を払った。だれ一人としてこの割り算が理解出来ないなかで、私が「解った」と叫ぶと「泉谷はしゃべりも出来ないのに！」とあ然とした様子で、私の方を振り返った。例題を解けといわれて前に出てチョークをとった。「二天作の五」という昔のそろばんを少し心得ていたので、教授の解法を簡単に見破ることができた。その夜のぶどう酒はひとしおおいしかった。

「門前の小僧お経をよむ」というが、読めない私にも少しずつ解説の手掛かりがつかめるようになった。講習会も終わりに近付いたある日、「勝美が読めた」ということで受講生から拍手をもらった。こうして終了試験を受けることになった。試験問題にはダディーニの書簡が使われた。みんな原本そのものであるから、各人に配布される問題は同じではなかった。ここではかのカンニングという非常手段は全く通用しなかった。予習・復習のてだてもなく、自力本願の手しかなかった。面接試験で私のミスは3カ所であることも教えてもらった。私はここで初めてイタリア人と私との距離がもはや無限大でないことを悟った。これは予期せざる成果であった。その夜送別会

が開かれ、「カンツォーネ・ジャポネーセ」と称して「黒田節」をゆうゆうと歌い上げて霧雨けむるプラトーの町をあとにしたのだった。

そして今、私はあの忍の一字でえた成果をもとに、その後各地の古文書館をかけずりまわってえたマイクロ・フィルムで中世商人の書き残した会計帳簿にしたりつつ、イタリア会計史の研究に勤しむ今日このごろである。しかし、その恩師メリス教授は私が帰国した昭和48年の12月持病の心筋こうそくでついに不帰の客となられた。先生から生前受けたご恩義に感謝しつつ、先生のごめい福をお祈りする次第である。